

令和 6 年 6 月 22 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00833

研究課題名（和文）疫病経験の生活史～幕末コレラ史料を素材に

研究課題名（英文）Life history of the plague experience ~Based on cholera historical materials at the end of the Edo period

研究代表者

鈴木 則子（Suzuki, Noriko）

奈良女子大学・生活環境科学系・教授

研究者番号：20335475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：文政五年の江戸、安政五年・六年の江戸・上方のコレラ流行について、日記史料を中心に、医学書・浮世絵・文学史料・町触等の史料の分析から、一般庶民および医者が、それぞれの地域で疫病をどのように経験したのかを明らかにした。また疫病下のジェンダー問題についても注目し、安政五年の江戸での疫病流行が、女性にとっては男性以上に経済的に過酷な経験であったことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コロナウイルス感染症の流行は、世界的な規模での疫病経験をもたらした。この経験を通じて確認されたのは、従来のマスとしての疫病史は、実際の個々人が経験した疫病経験を描くことができないということである。本研究は、日記史料を中心に個人の視点から疫病経験を復元した。また今回の研究を通じて、幕末における交通やメディアの発達、情報の画一化とともに情報格差を生み出していった様子を明らかにできた。そのことが個人の疫病経験に及ぼす影響についても分析を加えることができた。

研究成果の概要（英文）：I analyzed the cholera epidemic in Edo and Kamigata in the 5th year of the Bunsei era and in the 5th and 6th years of the Ansei era, focusing on diary materials, as well as medical books, ukiyo-e prints, literary materials, town records, and other historical materials. Through this work, we clarified the experiences of ordinary people and doctors regarding the epidemic.

I also analyzed gender issues during the epidemic. Specifically, it has been revealed that the epidemic that occurred in Edo in 1987 was an economically harsher experience for women than for men.

研究分野：日本近世史

キーワード：疫病 コレラ 日記史料 出産

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2020年春からのコロナの経験は、多くの犠牲者を出す急性感染症が、ひとりひとりの心のありようや日常生活の形を大きく変えてしまうことを、私たちに強く印象付けた。しかし従来の疫病史研究をひもといても、生活の次元でのこういった多様で、おそらく当事者にとってはきわめて切実であったはずの個人の疫病経験に視座をおいた論文はみあたらなかった。主流となっていた疫病史は、グローバルヒストリーの文脈の中で疫病が世界史をいかに変えていったのかを、近代国家や植民地政策の展開と関わらせて分析する研究であった。伝統的な疫病史研究でも、疫病はマクロな視点から集団の経験として位置付けられることで、はじめて歴史叙述としての価値を与えられてきた。

研究代表者はコロナ禍の生活を通じて、日常の生活史の文脈の中で個人の疫病経験のありようを問うミクロな歴史研究も、また重要な疫病史研究であると思いついた。疫病を経験するのは常に個人である。疫病流行の中で日々に変化する心のありようや人間関係、病への対応の仕方など、具体的な個人の疫病をめぐる経験を丁寧に復元する疫病史が求められているのではないかと強く感じた。マクロな疫病史もまた、このようなミクロな個人の疫病史を前提に、ひとり一人の生活経験から再構築されることによって、歴史研究としての精度・実証性・意味を深めることができるはずである。

本研究はこのような問題意識から、日記史料を中心とするエゴドキュメントに着目し、個人の疫病経験の復元を行うことをめざした。

2. 研究の目的

(1) 疫病経験の復元

1点目は、各地域における日記史料などのエゴドキュメントを中心に、コレラの疫病経験を復元することをめざした。

これまでの疫病史の叙述は、幕府や藩、町文書や村方文書の法令や記録、医学史料などによって構築されてきた。また江戸であれば、幕末のコレラ流行時の戯作や随筆・浮世絵などが多く残されていて、諧謔やデフォルメが加味された都会人の心性を推測することも可能である。だがこれらの史料が示すのは個人の疫病経験ではなく、集団的経験であり、概括された心性の記録である。

町や村、五人組や血縁者、同業者集団といった様々なレベルの共同体の中で展開された医療対策、祈祷、まじない、救恤や看病・葬式に至るまでの相互扶助、感染防止のための行動規制などに、人々はどのように向き合っていたのか、日々の状況変化の中で人々の気持ちはどのように動いていったのだろうか。本来、これらの疫病の経験は各人の階層や生活履歴・教養レベルに応じて異なるはずだが、従来の研究ではそこが十分に明らかではない。疫病流行下の人々の生活史は、従来漠然と捉えられてきたといえよう。これを史料に基づいた実証研究とすることをめざした。

(2) 疫病経験の地域性と情報のありようへの着目・分析

2点目は、各地域の疫病経験に与えた情報の影響に着目し、検討を加えることをめざした。安政のコレラ流行の際、江戸の街では「くだ狐」が跋扈し、上水や海に毒が混入されたとか、膨大な数の死者数情報といったフェイクニュースが拡散した。コレラ退散のためには伝統宗教から民間信仰に至るまで、様々な祈祷やまじないが見境なく総動員されていく。この混乱を従来の研究は“オルギー”や“フォークロアの活性化”と評価した。

ところが地方のコレラ史料の収集を進めていくと、驚くほど江戸と共通する噂や呪術的対応、治療法情報が、山陽道や四国、東北を含む広範囲で確認される。その背景は、民俗的習俗の一致というよりも、地方まで巻き込んだ幕末における情報網の発達に求めるべきだと本研究では推測した。

すなわち人々は素朴にフォークロアを踏襲するだけでなく、情報収集した種々の危機対応方法を実践しているのではないかと想定した。それは、コレラが歴史的に未経験の新しい病であったことも影響していよう。地方も巻き込んだ幕末の情報化社会の展開が、病への対応を含む「疫病経験」のありようを変えていった可能性がある。本研究ではコレラへの対応の仕方の地域性と江戸を核とする広域的な共通性との、双方を分析することで、民衆レベルにおける幕末コレラの「疫病経験」の実態とその展開過程を把握することをめざした。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者の鈴木則子は、幕末の輸入新興感染症として多数の死者を出し、人々の生活史に大きな影響をあたえたコレラについて、エゴドキュメントを中心に史料分析を行った。

(2) 研究分担者の横田冬彦は、近世から近代にかけての妊産婦の感染症による死に着目し、エゴドキュメントを中心に分析を行った。また同時にエゴドキュメントから多死社会の江戸の死生観について分析することを通じて、病の経験に関する考察を行った。

4. 研究成果

研究成果は大きく分けて下記の7点をあげることができる。幕末の疫病であるコレラの研究を軸に、江戸時代から近代にかけての感染症をめぐる諸問題に視野を広げることで、エゴドキュメントによる江戸時代の感染症を巡る心身の歴史研究の射程を広げること成功した。

(1) エゴドキュメントに基づく疫病経験の再構築

榎屋弥兵衛の日記『袖日記』(駿河国大宮町)を用いて、安政五年のコレラと幕末の天然痘の経験を分析した。コレラの疫病経験については、論文「安政五年コレラ流行をめぐる<疫病経験>- 駿州大宮町榎屋弥兵衛の日記から-」(『歴史学研究』(1011) 12-25 2021年7月)にて詳述した。疫病が町へ侵入してくる前兆の段階から流行が収拾までのプロセスにしたがって、弥兵衛とその周囲の人々の緊張感、病者やその家族に対する感染恐怖に基づく差別意識、それと同時に強まる共同体内の一体感、感染状況や医療に対する江戸からの情報が迅速にもたらされている状況を明らかにした。

また、小児感染症であった天然痘についても、『袖日記』の分析から、種痘の導入前には集団の病として経験された天然痘が、種痘導入により個人的病となって、痲痘神に対する意識にも個人差が生じたことを指摘できた。その研究成果は日本医史学会学術大会の市民向け講演会「江戸の流行り病と人々の暮らし-幕末の痲痘と種痘導入をめぐる-」を通じて社会に還元した。

(2) 疫病経験のジェンダー差の指摘

安政五年のコレラ流行下の江戸で、寡婦となった女性や貧困女性が経済的困難ゆえに身売りするようになると揶揄する戯文が何種類も版行されたことが確認された。疫病経験はジェンダーによって異なることを明らかにした。

また『袖日記』の分析から、コレラ流行下では、流行地に住む親族の看護に女性達が動員され、感染して死亡する状況を指摘した。

(3) 近世人にとって重要な感染症の網羅的考察

コレラ以外にも江戸時代の主要な感染症を取り上げて分析を加えた。感染症ごとの疫学的性質の違いや医学的説明のされ方だけではなく、身分・経済力・ジェンダー・都鄙の差などにより、同じ感染症でも捉え方が異なる状況を明らかにした。研究成果は書籍『近世感染症の生活史 医療・情報・ジェンダー』(吉川弘文館 2022年)としておおよけにした。

(4) 幕末近世医学の感染症対応の分析

緒方洪庵著『虎狼痢治準』の詳細な分析を通じて、幕末日本とヨーロッパのコレラ治療の実態を明らかにした。この分析によって『袖日記』に記載されたコレラの薬方や対処法に、西洋近代医学が影響を与えていたことが確認できた。『虎狼痢治準』の解説は『緒方洪庵全集 第3巻(中)』(大阪大学出版会 2024年)で広く公開した。

(5) 近世~近代の妊産婦死亡に関する研究

近世から近代にかけての妊産婦死亡率の高さは、産褥熱などの感染症に依るところが大きいと従来考えられていたが、日記史料の中の出産記事などを分析することを通じて、難産による死亡が相当な割合にのぼることを明らかにした。この研究成果は2023年の日本人口学会関西支部年次大会講演「近世~現代における妊産婦死亡と死産、乳児死亡」や、同年の医療とジェンダーの歴史研究会第1回シンポジウム報告「近世~近代における妊産婦死亡率について」を通じて、広く一般に公開した。

(6) 近世の死生観に関する研究

江戸時代は感染症による多死社会と見られがちであるが、中世との比較では、戦乱で命を落とすことがなく、また生産力の向上が大量の疫病死を相対的に減少させ、豊の上で死ぬる社会、寿命を全うさせよう社会を実現させた。このことが庶民まで含めて、おのれの死について、また死に方について深く考える文化を受容させていく。このような状況を、近世に出版された書籍の傾向分析と、地域の日記史料から明らかにした。研究成果は「近世人の死と葬礼についての覚書」(岸本覚・曾根原理編『書物の時代の宗教 日本近世における神と仏の変遷 アジア遊学 287』、勉誠出版)などで論じた。

(7) 日記研究の可能性に関する提言

大坂の「八尾八左衛門家文書」に含まれる日記史料分析から、日記史料が感染症や妊娠・出産、人々の養生観や死生観など、身体と心のありようの歴史を分析するためにも有効であることを指摘するとともに、地域史の中で活用されていない江戸時代の日記史料がまだ数多くあり、日本のエゴドキュメント研究の今後の展開の可能性を提言した。研究成果は「八尾八左衛門家文書と日記研究」(『地域研究いたみ』53、2024年)によって公開している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木則子	4. 巻 1011
2. 論文標題 安政五年コレラ流行をめぐる<疫病経験> - 駿州大宮町榎屋弥兵衛の日記から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 12,25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田冬彦	4. 巻 53
2. 論文標題 「八尾八左衛門家文書と日記研究」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『地域研究いたみ』	6. 最初と最後の頁 3,28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 鈴木則子
2. 発表標題 江戸時代の疫病史料にみる女性
3. 学会等名 総合女性史学会 2021年度大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木則子
2. 発表標題 安政六年コレラ流行と摺物
3. 学会等名 第26回 国際浮世絵学会 秋季大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木則子
2. 発表標題 江戸の流行り病と人々の暮らし - 幕末の疱瘡と種痘導入をめぐって -
3. 学会等名 第122回日本医史学会総会・学術大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木則子
2. 発表標題 幕末のコレラ禍と人々の暮らし～駿河国富士郡大宮町の史料から
3. 学会等名 徳川みらい学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横田冬彦
2. 発表標題 「近世～現代における妊産婦死亡と死産、乳児死亡」
3. 学会等名 日本人口学会関西支部年次大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横田冬彦
2. 発表標題 「近世～近代における妊産婦死亡率について」
3. 学会等名 医療とジェンダーの歴史研究会 第1回シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 鈴木則子（共著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 想像する身体 上巻	

1. 著者名 鈴木 則子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 254
3. 書名 近世感染症の生活史	

1. 著者名 横田冬彦（共著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 256
3. 書名 書物の時代の宗教：日本近世における神と仏の変遷	

1. 著者名 横田冬彦（編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 544
3. 書名 法隆寺史：近世 中	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	横田 冬彦 (YOKOTA FUYUHIKO) (70166883)	京都大学・文学研究科・名誉教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関